新しい語学教育の試み
－国際遠隔授業と地域連携によるサテライト教室（２）

To establish a New Language Teaching
－An Off-Campus Satellite Course Through International Distance Lectures (2)

Sonia Mycak[i]・巽　　徹[ii]・西澤康夫[iii]・廣田則夫[iv]
Sonia Mycak, Toru Tatsumi, Yasuo Nishizawa and Norio Hirota

0. 序

本研究は，上田他（2010）で中間報告された，国際遠隔授業による新しい語学教育の試みの取り組みを総括し，その成果や課題を明らかにするものである。シドニー大学文学部と岐阜大学教育学部の学部間学術交流提携に基づく国際遠隔授業の取り組みは，平成15年度に「モジュール交換方式」により開始された。それをさらに発展させ，平成21年度後学期にパイロット事業として，学期全体に渡るコース（フルコース）としての国際遠隔授業を実施したものである。

本研究では，①語学（英語）教育プログラムの構想と実践の内容を振り返り，②受講者アンケートの結果を分析し，③授業実践者から見た本プログラムの成果と課題を明らかにする。また，それらを踏まえて，新しい英語教育プログラムの開発と国際遠隔教育についての今後の展望を示そうとした。本稿の執筆に当たっては，①②と全体の構成を巽・廣田が，③を授業実践者であるMycakが，④を西澤が担当した。

１．国際遠隔授業の構想と実践の概要

シドニー大学文学部と岐阜大学教育学部では，平成15年度より，既存の授業科目の一部分（１コマ～数コマの授業）を交換する「モジュール交換方式」の国際遠隔授業を行ってきた。それをさらに発展させ，新しい語学教育の試みとして，学期を通した国際遠隔授業の実施をめざしたのが本研究で報告する取り組みである。本プログラムの特徴をまとめると次の通りである。

１）国際遠隔授業を岐阜大学教育学部における英語教育科目の一つとして実施した。
２）ＪＲ岐阜駅内のサテライト教室を用いて行われたOff-Campus型の国際遠隔授業である。
３）岐阜大学学生に加え，岐阜市民にも受講対象者を拡大した授業である。
４）一定水準以上の英語力を有する学習者を対象とした授業である。

本科目受講者は，岐阜大学学生９名，社会人（岐阜市民）９名の合計18名であった。授業実施の概要は表１の通りであり，平成21年度の後学期に（10月～３月）ほぼ週一回ずつ，各回90分の授業を実施した。

---

i　シドニー大学文学部
ii　岐阜大学教育学部
iii　平成医療短期大学
iv　岐阜大学教育学部

表１　授業実施の概要

授業回	内　　容
1	Introduction to Australia（対面授業①）
2	Introduction to Australia（対面授業②）
3	Becoming a British Colony
4	Aboriginal Australia: the Arrival of Captain Cook and Colonial Australia
5	Federation: the Commonwealth of Australia is Born
6	The Anzac Legend
7	The Second World War and its Aftermath
8	Post-war Immigration: From the White Australia Policy to the Universal Migration Act
9	From Assimilation to Integration to Multiculturalism
10	Australian Multiculturalism
11	A Multicultural Japan?
12	Australia-Japan Relations and Japanese Culture in Australia
13	Film “Japanese Story”
14	Aboriginal Australia Today
15	Conclusion to the Course

コースのテーマは「オーストラリアの文化の多様性」(Australian Culture and Cultural Diversity) で，各回の授業は表１に示す内容で実施した。１～７回の授業では，オーストラリアの移民による文化の多様性について理解を深めるために，国の成り立ちや移民の歴史について扱い，それを踏まえて８回以降の授業で多文化共生について考え，さらには，日豪の関係や日本における多文化共生についても議論を深めるコースの設定を行った。

２．受講者アンケートの調査結果と考察

受講者の立場から国際遠隔授業の効果や課題を明らかにするため，受講者全員を対象にして，コースの終了後にアンケート調査を行った。受講者のうち学生7名，社会人7名から回答を得た。アンケートで調査した内容は，次の通りである。

１）受講の動機について
２）国際遠隔システムのハード面について
３）講義で使用される英語について
４）授業の形態や授業内の学習活動について
５）講義で取り上げたトピックについて
６）コース履修の成果，プログラムの満足度について

これらの項目について，学生・社会人別に集計を行い分析，考察した。

2.1　受講の動機

受講の動機について尋ねた。結果は表２の通りである。学生と社会人受講者では受講の動機において若干の違いが見られた。

表２　受講の動機（複数回答可）

	学　生	社会人	全　体
英語力を維持・向上させたい	85.7%	100%	92.9%
オーストラリア文化を理解したい	85.7%	57.1%	71.4%
海外の大学の講義を体験したい	57.1%	28.6%	42.9%
教養を高めたい	57.1%	14.3%	42.9%
岐阜大学の公開講座に興味があった	0%	42.9%	21.4%
開講場所が便利	28.6%	57.1%	42.9%
開講時間の都合がよい	14.3%	42.9%	28.6%
受講料が無料	42.9%	42.9%	42.9%
その他	0%	0%	0%

社会人受講者は，自らの「英語力の維持・向上」を受講の主な動機としているのに対して，学生はそれに加え，「オーストラリア文化の理解」も合わせて重視している。また，学生にとっては「海外の大学の講義を体験」や「自らの教養を高めるため」との答えが半数以上を占めたのに対して，社会人では，これらの項目は，それほど高い割合は占めていない。また，社会人受講者にとっては，開講場所や時間，費用が（今回は無料）受講を決定する要因の一つとなっていることが伺える。

2.2　国際遠隔システムのハード面について

次に，国際遠隔システムのハード面について，表３の7項目をどの程度満足と考えるか，5段階で評価し回答してもらった。データの処理に当たっては，「大変満足」を５点，「ある程度満足」を４点，「どちらともいえない」を３点，「やや不満」を２点，「不満」を１点とし，その平均点を示した。

表３　遠隔システムについての満足度

	学　生	社会人	全　体
スクリーンの大きさ	5.0	5.0	5.0
画像の鮮明さ	4.43	3.86	4.16
文字の大きさ	4.71	3.71	4.25
スピーカーの音量・音質	4.86	3.86	4.39
パワーポイントの見やすさ	4.71	3.86	4.31
動画の見やすさ	4.43	3.57	4.03
教室の学習環境	4.86	4.29	4.59

会場となった岐阜市生涯学習・女性センター「ハートフルスクエアーＧ」の講義室は，５０名ほど収容可能な部屋である。シドニー大学から配信される講義はPOLYCOM社製ビデオ会議システムを使用し，プロジェクターで講義室前面のスクリーンに投影した。岐阜講義室内の受講者の映像と音声は同システムのカメラとマイクを通してシドニーの授業者にも配信された。

アンケートの結果から，全体的には，システムに関する各項目について，４点以上の評価がなされ，映像や音声の質は受講者に満足のいくものであったことがわかる。ただし，「動画の見やすさ」につ

いては，比較的満足度が低かった。これは，講義の中で用いられたDVD資料のうち，画質や音質が不十分なものがあり，それにより満足度が低く評価されたものと思われる。DVD資料については後節で詳しく考察する。

2.3　講義で使用される英語について

講義の中で用いられる英語について，表４にある項目をどの程度満足と考えるか，5段階で評価し回答してもらい，その平均点を示した。

表４　講義で使用される英語の難易度

	学　生	社会人	全　体
講師の英語の難易度	4.0	4.14	4.07
話すスピード，話し方	4.43	4.0	4.23
講師と受講者のコミュニケーション	3.14	3.57	3.34
受講者間のコミュニケーション	3.71	3.14	3.45
講義のハンドアウトや参考資料	4.43	4.0	4.23

「講師の英語の難易度」「話すスピード，話し方」「講義のハンドアウトや参考資料」の項目で，「ある程度満足」とされていることから，講義において講師が使用する英語や配布する資料の理解は十分できた模様である。また，講師が受講者の英語力を理解し，学習者のレベルに合うように講義を進めた結果と言うこともできる。たとえば，難解な表現を他の表現へ言い換えたり，内容を繰り返したり，パワーポイントを活用し視覚的材料を提供することにより，学習者の理解を促進しようするように授業が工夫された成果であろう（上田他，2010）。ただし，「講師と受講者のコミュニケーション」「受講者間のコミュニケーション」の項目で，満足度が十分とは言えないことがわかる。授業者から示された話題についてディスカッションを行う段階では「考えが即座にまとまらない」「言おうとすることが英語で即座に表現できない」などの理由で沈黙が続くことがあり，講義の内容を受けて，即座に考えや意見を英語で発信することに受講者が難しさを感じていたことがわかる。しかし，今回の遠隔授業の最大の利点は，英語話者である授業者と受講者が母語を交えずに学習を進めていくことである。英語を受信・発信する即時性に受講者が直面し困難を感じることは，同時に受講者の英語力を伸長させる機会と捉えるべきであろう。

2.4　授業の形態や授業内の学習活動

授業の形態や授業内の学習活動について，表５にある項目をどの程度満足と考えるか，5段階で評価し回答してもらい，その平均点を示した。

表５　授業の形態や授業内の学習活動

	学　生	社会人	全　体
対面授業（最初の２回，講師が岐阜教室にて授業を実施）	5.0	4.71	4.86
パワーポイントの使用	4.86	4.29	4.59
動画の視聴	3.86	3.43	3.66
グループ・ディスカッション	3.83	3.57	3.7
講義内容に関する質疑応答の時間	3.71	3.71	3.71
授業外での学習（ライティングの宿題，映画の視聴）	4.17	3.86	4.01
補足・参考資料の印刷配付	4.33	3.86	4.1

表５から分かるように，どの項目においても評価が4点前後であり，コース全体を通して，授業の形態や授業内の学習活動に受講者は概ね満足していると言える。特に，第１回目及び第２回目の対面授業は，高い評価がなされている。今回は，コースの打ち合わせを行うために講師が来日する予定があったため，偶然に対面授業を行うことができた。コースはじめに対面授業を行うことによって，授業者にとっては，受講者の英語力や受講の動機，コースへの要望など，学習者の実態を把握しやすくする利点がある。また，受講者にとっては，講師を身近に感じ，学習の動機付けになるという効果があり，可能であれば今後も継続して実施していきたい。

学生・社会人ともに満足度が4点に満たなかった項目は，「動画の視聴」，「グループ・ディスカッション」，「講義内容に関する質疑応答の時間」であった。「動画の視聴」の満足度が低かった原因として，①歴史的資料の性格上，モノクロ映像で画質・音質ともに劣るものがあったこと，②受講者がネイティブ・スピーカーの通常の発話になれていないため，ナレーションやインタビューの英語が聞き取りにくかったこと，などが考えられる。①については，遠隔システムを通した動画の提供では，画質が通常に比べ劣化することを考慮し，資料映像の選択に注意を払う事が必要であり，今後の課題である。②については，講師が補足説明を適宜加えるとともに，英語字幕やスクリプトを受講者に提供することにより受講者の理解度が向上することが考えられる。また，受講者が，日頃よく耳にする英語は，学習教材の英語であり，それと異なる「生の英語」の聞き取りに戸惑いを感じていることから，段階的に「生の英語」を聞き取る機会を仕組んでいくような指導のステップを考えていく必要がある。

「グループ・ディスカッション」に関しては，アンケートの受講者の自由記述欄に，グループ・ディスカッションの時間の不足や英語によるグループ・ディスカッションに不慣れであり活発に発言できなかったなどの記述が見られた。講義の中で，ディスカッションにつながる，段階を踏んだ何らかの「橋渡し活動」を設定する必要があったと思われる。また，ディスカッションのトピックなどを事前に提示し，受講者にディスカッションの準備を促すような指導の手立ても有効であると思われる。「講義内容に関する質疑応答の時間」については，講師の英語はわかりやすかったものの，受講者が受け身で講義を聴く場面が多く，講義の途中で講師とインターラクティブにコミュニケーションを行う雰囲気がなかったとの指摘があった。英語話者に対する通常の講義では必要のない配慮であるが，講義の進行時に受講者からの発言を受ける間を意図的に設けることや，受講者が積極的に講師に質問をしたり，意見を述べたりするような学習行動を奨励する働きかけを行うことが重要であると思われる。

2.5　講義で取り上げたトピック

講義で取り上げたトピックについて，それぞれ，どの程度興味があったか，5段階で評価し回答してもらった。データの処理に当たっては，「興味がある」を５点，「やや興味がある」を４点，「どちらともいえない」を３点，「あまり興味がない」を２点，「全く興味がない」を１点とし，その平均点を示した。

授業	内　　容	学　生	社会人	全　体
1	Introduction to Australia（対面授業10/13）	5.0	4.29	4.58
2	Introduction to Australia（対面授業10/20）	5.0	4.14	4.5
3	Becoming a British colony	4.25	3.86	4.02
4	Aboriginal Australia: the arrival of Captain Cook and Colonial Australia	4.25	4.0	4.1
5	Federation: the Commonwealth of Australia is Born	4.25	3.43	3.77
6	The Anzac legend	4.0	3.43	3.67

7	The Second World War and its aftermath	4.0	3.86	3.92
8	Post-war immigration: From the White Australia Policy to the Universal Migration Act	4.5	4.17	4.32
9	From Assimilation to Integration to Multiculturalism	4.75	4.67	4.7
10/11	Australian Multiculturalism / A Multicultural Japan?	4.75	4.5	4.61
12	Australia-Japan relations and Japanese culture in Australia	4.43	4.33	4.39
13	Film “Japanese Story”	3.75	3.8	3.78
14	Aboriginal Australia Today	4.5	4.17	4.35
15	Conclusion to the course	4.43	4.33	4.39

表６から分かるように，すべてのトピックが概ね興味を持って受け入れられたようである。特に「９．From Assimilation to Integration to Multiculturalism」「10/11. Australian Multiculturalism/A Multicultural Japan?」については，最も高い興味が示されている。本コースのテーマである「オーストラリアの文化の多様性」の中心的な内容を扱った講義であり，受講者の関心が特に高かったと言うことができる。4点未満の比較的興味の度合いが低かったのは，３～７のオーストラリアの歴史に関する話題である。現在の「オーストラリアの文化の多様性」を理解するには，オーストラリアという国の成り立ちを歴史的に理解することが不可欠であることから，５回にわたり第二次世界大戦までの歴史について扱った。しかし，特に社会人受講者の興味が比較的低かった。

「13. Film “Japanese Story”」は，受講者が表題の映画をＤＶＤで家庭学習で各自視聴し，その内容を議論する講義であった。内容は，日本人ビジネスマンがオーストラリアを訪れ，日本との文化の違いを体験していく物語である。日本文化をステレオタイプに捉えた面もあり，日豪互いの文化のとらえ方を題材とするものであった。しかし，ＤＶＤが難解であり，さらに，１時間半ほどの長編で，そのうちどの部分に焦点を当てて理解を深めればよいか戸惑った受講者もおり，興味の度合いが低く評価されたと考えられる。今後の題材選びや視聴のポイントの示し方に工夫が必要である。

2.6　講座の成果，満足度

本講座全体を振り返り，表７のそれぞれの項目に対してどのように感じたか，5段階で評価し回答してもらった。「強くそう思う」を５点，「ややそう思う」を４点，「どちらともいえない」を３点，「余りそう思わない」を２点，「全くそう思わない」を１点とし，その平均点を示した。

表７　講座の成果，満足度

	学　生	社会人	全　体
総合的に判断して，この講座に満足している。	4.43	4.29	4.36
この授業を知り合いや，後輩に勧めたいと思う。	4.43	3.71	4.1
公開講座の会場や時間帯はこのままでよい。	3.86	3.71	3.79
次の講義の予習・準備が可能となる材料を授業前に配布してほしい。	3.71	3.71	3.71
授業外で取り組む課題・宿題をもっと出してほしい。	3.14	3.57	3.34
講座の受講を通して英語を聞く力が高まった。	4.14	3.71	3.94
講座の受講を通して英語を話す力が高まった。	3.29	3.14	3.22
講座の受講を通して英語を読む力が高まった。	2.71	3.29	2.98
講座の受講を通して英語を書く力が高まった。	2.43	3.14	2.76
講座の受講を通してオーストラリア文化の理解が深まった。	4.57	4.43	4.5

本コースの総合的な満足度は，学生，社会人ともに4点を超え，受講者にとって満足できる内容であったと判断できる。また，コースを終えた時点における各自の英語力の伸びについて尋ねると，「聞く力」の伸びが受講者に最も実感されていることがわかる。受講者の一人は「初めのうちは，講義内容を聞くのが大変だったが，最後の方では，言っていることがすべて分かるようになったのを実感できてうれしかった。」とコメントしている。このことからわかるように15回の授業を通して，英語を聞くことに慣れ，英語のみでの講義に対する不安が減る一方，英語を理解する自信が育ったと言える。しかし，「話す力」「読む力」「書く力」の伸びが，十分実感されるには至っておらず，コースの全体を通して，英語を用いて発信する機会を意図的に設けたり，授業外で「読む」「書く」学習を課するコース作りが今後必要である。受講者は，「講義の予習・準備が可能となる材料を授業前に配布する」ことや「授業外で取り組む課題・宿題」などを強くは望んでいないものの，必要性は感じているものと判断できる。受講者の負担過多にならない程度に授業準備の課題を提示することが必要であり，それにより講義内での英語による発話活動がより促進されると期待できる。

社会人受講者の多くは，「英語力の維持・向上」を本講座の選択の動機としていたが，コース終了後は，オーストラリア文化の理解が深まったと強く実感する受講者が多いことが分かる。受講者アンケートの自由記述には，次のようなコメントが見られた。「Australian Culture and Diversityというより Australian Historyとしての面白さがあった。連続する講義に一貫性があって良かった。」「単に英語力維持ばかりではない学習の場となった事に満足している。」「オーストラリアについてはほとんど知識がなかったが，今回たくさん勉強して理解が深まった。これからもオーストラリアのことを勉強していきたい。」

本プログラムで受講者は，英語を「手段」として活用し「オーストラリアの文化の多様性」について学んだ。英語を手段として活用することが，受講者の語学力を高める機会であり，その機会を提供できたのは，国際遠隔授業の取り組みによるものである。特に，今回の取り組みのように，一定の水準以上の英語学習者を対象と考えたとき，一連の内容を学ぶツールとして英語を用いることは，真の語学力，コミュニケーション能力を育成するために有効であると思われる。次に，授業者による本プログラムの振り返りと考察をまとめる。

3．授業実践者から見た本事業の成果と課題

GIFU JR STATION COURSE: A REPORT BY SONIA MYCAK

“Australian Culture and Cultural Diversity” was the length of one semester and in accordance with Japanese requirements, consisted of 15 classes, each of 90 minutes duration. The course was delivered from the University of Sydney as a form of distance learning, using live video-conferencing transmissions.

The course was managed by Gifu University. However it was also available to citizens of Gifu city, through the involvement of the Life-Long Learning Centre of the Gifu City Government. Through such engagement with the local community, adults outside of university had the opportunity to learn about the history, culture and society of Australia.

As the course was open both to university students and the wider public, the cohort of 18 comprised 9 Gifu University students (studying English as a foreign language) and 9 citizens of Gifu city. Classes were held in premises attached to Gifu JR station. The classroom and

video conferencing equipment were provided by the Gifu Local Government and Gifu University.

This is understood to be the only existing cross-institution distance education course between Australia and Japan. The National Institute of Multimedia Education (NIME), a Japanese government agency dedicated to research and development in e-learning/distance education in the tertiary sector, has reported that the current relationship between Gifu University and the University of Sydney is the only institutional programme of distance learning between a Japanese and an overseas university ("Current Status and Challenges of International Activities Using ICT in Japanese 4-year Colleges and Universities: Results of the Survey conducted in 2004" NIME Research Report 15, 2006).

After the course had finished, a survey was conducted by Gifu University coordinators to obtain student feedback. The results of this survey provide quantitative data. All percentage figures and numerical ratings in this report refer to this survey. A questionnaire was given to the students in the first week of the course. This provides qualitative data. All quotations are taken from these questionnaires.

Pedagogical aim

The aim of this course was to introduce Japanese students to the history, society and culture of Australia. As the settlement of Australia includes the original Indigenous people, the arrival of the British in 1788, post-war immigrants from Europe, and more recently people from Asia, Africa, the Middle East and the Pacific, the intention was to study the development of Australian society and culture from the perspective of Australia's British colonial history, Aboriginal Australia, and the history of immigration and the development of multiculturalism. The intention was also to explore the relationship between Australia and Japan.

While Australia is of particular interest to Japan given our strong trade and strengthening security relationships, multiculturalism is now increasingly relevant to Japan. Immigration and the settlement of foreign residents is one of the most critical issues facing contemporary Japan. This is evident in the current debate within political circles and a recent proposal by the national government to implement greater levels of immigration as a response to a decreasing and ageing population. This question is most pressing for those in the Tokai area of Japan, as these municipalities have the highest number of foreign residents (due to employment in local manufacturing industries). The scholarly focus upon multiculturalism within this course of study, together with special attention to the Australia-Japan relationship, aimed to increase the Japanese students' understanding of cultural diversity as an increasingly shared interest with Australia.

The students' interest in multiculturalism was reflected in the scores by which they rated each lesson topic. Out of a possible score of 5 (meaning “very much interested”), the lectures

on Australian Multiculturalism? “Post-war Immigration: From the White Australia Policy to the Universal Migration Act” and “From Assimilation to Integration to Multiculturalism”? rated highly at 4.7 and 4.3. Similarly the lesson on “Multicultural Australia; Multicultural Japan?” rated highly at 4.6. These topics received some of the highest ratings in terms of students' interest.

Evidence of the interest in multiculturalism can also be found in the responses to the questionnaire. As one university student explained: “I’ m interested in learning about Australia because there are many races in Australia and it's a very different situation than Japan”. Another stated: “There are a lot of immigrants. So there are many cultures. It's a rare thing. So I'm interested in Australia”. However, it is the words of one citizen which most poignantly show how a greater understanding of multicultural Australia can assist in adapting to an increasingly multicultural Japan: “Australia chose a policy of accepting immigration from countries which are not composed of white people. That means you accept a multiracial society. The Japanese are going to live in such a world because of less young generation. Many people from China, Philippines, Brazil walking around in my neighbourhood is the normal scene. I have a mixed feeling. I should accept that scene. I can't accept it. How do the Australian people prepare yourselves to face that reality?”

Student motivation

The predominant reason given for joining the course was to improve English language proficiency. Survey results show that 93% of the students gave this as a reason for enrolling. Although one would have expected the Gifu University students to be motivated in this way because they are studying English as a foreign language, in actual fact the percentage was slightly lower for the university students (86%). By contrast 100% of the non-student body stated that wishing to improve English was what had brought them to this course.

The second most popular reason for enrolling in the course was “to understand Australian culture”. The same percentage of university students (86%) gave this as a reason for undertaking the course. However, a significantly lower percentage of non-students (57%) nominated this as the aim of their study. Taking these two figures together, 71% of the student body undertook the course in order to study Australian culture and society.

We can therefore deduce that for the university students, there were two equally important reasons for undertaking the course: to enhance their English language skills and to learn about Australia. For the citizens the primary motive for joining the course was to improve English language skills. As one citizen stated when asked why she chose this course: “Because it will be a rare chance to practise English”.

English language proficiency

No tuition was undertaken in Japanese and students were expected to have an intermediate

to high level of English language proficiency. Lectures were written taking into account that the audience consisted of non-native users of English. Nonetheless the material was of reasonable complexity (as it addressed social, political, historical and cultural topics) and of substantial length (some lectures reaching as many as 3,700 words).

Survey results revealed that the students coped well with the level of English employed during the course. They were asked to rate to what extent they were satisfied with the English level, with a score of 5 meaning "very satisfied" down to a score of 1 to mean "unsatisfied". The level of English used in the lectures was given a satisfaction rating of 4.1. The speed of delivery was given a satisfaction rating of 4.2. Satisfaction with the level of English in the hard copy materials distributed was similarly rated at 4.2. While there will always be differing English language abilities within such a group of students, it appears from these results that the lessons were appropriately pitched and all students found the material accessible and comprehensible.

Technology

The distance learning format of the course provided a unique opportunity for an easily accessible international experience. One student made this clear when explaining why she had chosen the course, saying "I was interested that I could learn from an Australian university in English by a telecom system".

The video conferencing system was assessed very favourably with regard to the size of the screen (given a score of 5, meaning "very satisfied"), quality of the picture (4.2), legibility of text on the screen (4.3), quality of sound (4.4), clarity of power point presentations (4.3), audio-visual quality of videos (4), and general classroom environment (4.6).

Teaching strategies

It was not appropriate to reproduce existing Australian studies material aimed at students in Australia. Such material assumes a prior understanding of Australian history and culture. Therefore there was a need to develop new materials for adult students who are non-native users of English, and have little or no prior knowledge of Australian history, culture and society.

The development of new and appropriate teaching materials appears to have been a success. The satisfaction rating for the lectures (with accompanying power point presentations) was 4.6 (out of a possible score of 5). Receiving a printed copy of the lecture, power point presentation or other material was given a satisfaction rating of 4.1.

The teaching material included a high visual component. Text was reproduced within power point presentations. Photographs and other images were also included with every lecture. However audio-visual presentations did not appear to play as important a role as expected.

A mid-range score (3.7) was recorded when students were asked to rate their satisfaction with the content of the videos played during class. The videos shown were documentary films made in Australia. They were produced for an Australian audience. This was the only learning resource used which was pre-existing and not produced specifically for the students. Perhaps this was why the students did not find the videos to be as satisfactory as the lectures and power point presentations (which were designed especially for them).

The first two classes of the course were held in person, in Japan. The first class provided an opportunity to outline the aims and structure of the course and teaching approach, and most importantly, allowed for lecturer and student introductions. A warm-up activity asked the students about their impressions of Australia. A speaking and listening activity involved distributing some familiar images of Australia and asking each student to speak about the image they had been given. A writing exercise required the students to compose an imaginative and creative short text about a striking image of Australia. These activities were designed to familiarise students with each other and the lecturer, while asking the students to consider their own perceptions of Australia.

A small research task was given as homework. Each student was given a topic and asked to prepare a three-minute talk to present to the class at the next lesson. The second face-to-face class opened with these student presentations, which were both informative and entertaining. A lecture and power point presentation titled "Introduction to Australia" followed. Props brought from Australia enhanced this presentation.

These face-to-face lectures were very important for creating a personal connection, group identity and morale. The importance of this was reflected in the survey results. The university students rated the face-to-face classes with a perfect score of 5 ("very satisfied"). The citizens gave a high satisfaction rating of 4.7. Taking the two figures together, the overall satisfaction with these face-to-face lessons was 4.9.

An issue to consider for the future is how to further develop interactive classroom activities. Mid-range scores (from 3.7 to 3.3) rated group discussion, question-answer sessions, interaction between students, and interaction between lecturer and students. These were all activities which required active and impromptu participation from the students. It is possible that they felt themselves unprepared and thus found the demands of spontaneous and improvised discussion somewhat difficult and therefore less satisfying, particularly as it involved English language use. It is also possible that a culturally specific dynamic was at play. Group discussions are frequently employed within Australian classrooms, as is the voicing of personal opinion. However, are Japanese students comfortable with these forms of debate? Other methods of interaction may need to be designed, together with less intimidating ways of engaging students in dialogue.

Another question to consider is the role homework or preparation should play. The survey results on this issue are not conclusive. When considering classroom activities, 'homework'

(defined as writing assignments and watching a DVD film at home) rated quite a high level of satisfaction with a score of 4. However, another set of questions brought a somewhat different response. Asked whether or not the students agreed with the following statement: "I would like to have more homework to do", the score was 3.3 (with 5 meaning "strongly agree" and 1 signalling disagreement). The statement "I would like to have a handout and material before the class for my preparation" rated a slightly higher score of 3.7 but can still be considered mid-range. Regarding the latter statement there was no difference between the ratings given by the university students and the citizens. While we can expect attendance at classes, it is not possible to ascertain conclusively whether university students and citizens would be able to dedicate extra time and effort, given their other responsibilities and commitments.

Concluding remarks

Overall satisfaction with the course was rated very favourably, with a total of 4.4 out of a possible score of 5. Within this composite figure there was no significant difference between the rating given by Gifu University students (4.4) and that given by Gifu citizens (4.3). When asked to consider the statement "I would like to recommend this course to my friends", the students agreed with a score of 4.1.

In keeping with the aim of this course, a good outcome appears to have been achieved. A score of 4.5 signalled agreement with the statement "I think I understand Australian culture and society more through this course". For those whose motivation had been to improve English language proficiency, the greatest gains appear to have been made in listening skills, as improvement in "English listening ability" ranked higher than speaking, reading or writing. This is to be expected given lessons used a lecture format and students were not often expected to complete reading, writing or speaking tasks.

４．新しい英語教育プログラムの開発と国際遠隔教育

明治以来の日本における英語教育の歴史は長く，日本の近代化を図る上で極めて重要な使命を果たしてきたが，ここ10年ほどのあいだに，世界情勢は大きく変わり，これからの若い世代に求められる英語力の水準と内容が著しく変わってきている。これからの英語力は国際社会の只中での即戦力が物をいう時代である。肌の色も言語も文化的背景もまったく違う人たち同士の出会いが半ば日常化し，ローカルかつグローバルな視点が不可欠となった現代日本の英語学習の到達目標は，英語で自在に読み，書き，議論し，交渉することの出来る能力の獲得に力点がおかれるようになってきている。そこでは，相当程度の語彙力，文法力，発話力に加え，幅広い視野と識見，さらに個人としての信念や価値観，あるいは人生観までが問われるのである。かつてのように，一方的に，一部の日本のエリートが海外から先進的な知識や技法を学んでくれば良いという時代ではもはやない。これからはエネルギー問題，環境破壊の阻止，防疫体制の整備，宇宙開発など，地球規模の様々な問題に関する優れたアイディアや情報の交換，活発な研究協力，知の連携が必要であり，国境を越えた対話と議論の場がますます多く必要になってくるのである。

しかし，このような流動化しつつある国際情勢に遅れずに有効に対応できる知的訓練とともに，必

要不可欠なコミュニケーションツールとしての英語力の養成をめざす，新しい英語教育の形を見つけ出すには，私たちは，これまでに蓄積されて来た豊富な経験を一旦括弧に入れ，まずは新時代の要請と真摯に向き合わなければならない。今日の国際環境に対応可能な英語能力を学生に身につけさせることは，私たちにとって果たして可能なのか。

日本人の英語教師はすべて原則として英語で授業を行うべき時代がもうもうとっくに到来している。しかし現実にはそれはなかなか難しい。ある程度以上の英語力がない学生に対して英語で授業をすることは，学生にとって苦痛であるだけでなく，授業効果もほとんど期待できないからである。そこには戦前と違って義務教育の中に英語を取り込んだ戦後の教育制度の問題点もあるであろう。しかしそれを批判することにも限界があるので，いわゆる「グラマー・トランスレーション・メソッド」，すなわち，文法重視の訳読方式を中心にした従来の教育方法が主として槍玉に挙がってきた。現在の英語入試問題は長文読解，語法問題，発音問題を加え，最近はさらにリスニングの問題を課するなど，いわゆるコミュニケーションを重視する姿勢が見られ，文部科学省の指導要領によって，英語を使ったコミュニケーション，いわゆるオーラルコミュニケーションが現場でも一部取り入れられていることと軌を一にする。

しかし，肝心なポイントは，英語教師自らが一体どのくらいオーラルコミュニケーションに熱心であるか，またどの程度ディベイトその他を指導する方法をマスターしているか，である。

この点，今回の岐阜大学の取組が持っている意味は極めて大きい。なぜならば，今回の英語教育企画担当者は，岐阜大学で英語教育が専門の英語教師であり，授業を実際に受けたのは，教育学部の英語教育専攻学生および，彼らと同程度の英語力をもつ一般市民である。そして今回の企画は，それらの学生および市民を，岐阜大学の正規の授業として位置づけられた国際遠隔教育，すなわち外国の大学の英語授業の中にいきなりぽんと放り込み，英語以外では決してコミュニケーションの取れない環境に敢えてさらしたからである。

今回の企画は，自分が担当すべき英語の授業の受講生の半数近くについて，一学期分の授業コマ数（通常15コマ）の全部を，全面的に一人の外国人の手にゆだねたのであり，形式論理的には，部分的責任放棄の側面を持っている。しかし，企画に即して見れば明らかなごとく，事の真相は共同責任，もしくは責任の分担なのだ。

また，今回の授業の中身について言えば，どのような授業展開をするにせよ，担当の外国人教師の個人的な裁量にすべてがゆだねられている。なぜなら，岐阜大学側としては，その専門分野であるオーストラリアの多文化主義を中心に授業を組み立ててほしいという以外は，一切当該教師の構想に任せたのである。当該教師から見れば，今回の授業は，自分の専門分野に関して委託を受けたものであり，それをどのようなコースメニューにして提供しようと，百パーセント自由だったはずである。

しかし，もう少し後ろに下がって大局を視野にいれるならば，まったく違った風景が見えてくる。すなわち，一人の外国人教師が自分の得意分野に関してまったく自由に授業を行ったというのは当てはまらない。逆に，岐阜大学がすべてを設計・立案し，それを外国の大学に依頼し，それを受けた授業者が，岐阜大学の教師と，授業内容，実施手順などに関して逐一相談・協議の上，カスタマイズされた形で実行されたのである。

したがって，実際のありようを言えば，日本の大学の英語教育担当者の望む形式と内容を持った授業が，共同で企画・設計され，その通りに実施されたのである。しかも，授業は両大学の実施担当者によってモニターされ，反省点があれば，受講生へのアンケート結果を含めて，次年度の実施企画にフィードバックされるのである。

では，共同設計ならびに共同実施を前提とする今回の国際遠隔授業の特色，もしくは強みとは何であろうか。それは以上の議論を踏まえて，次の６項目にまとめられる。

１．国際遠隔授業の全体を統括し，授業の共同設計・共同実施に当たる日本側の英語教育担当者は，

教室の開錠，施錠を始め，機器の操作，配布資料の用意，通信テスト，通信トラブルへの対処などを行いつつ，現場に張り付きながら，受講生の受講態度や反応を至近距離で観察することで，その教育効果を肌で感じ取ることができる。

2．海外の授業担当教官は，日本の授業設計者から依頼された授業内容に応じて，また日本の受講者たちの英語力に応じて，講義案を新たに書き下ろし，学期が始まった後でも，必要に応じて，設計者の了解を求め，またその意見に耳を傾けつつ，授業の手法や内容を，目的に合わせて微調整することができる。

3．日本の大学の英語教育担当者の通常の能力を超える技法，もしくは内容を持った授業を学生に受講させることができる。

4．実際に外国で受講しているのとほとんど変わらない雰囲気の中で，相当程度に高度な内容を持った授業を受けることができる。

5．日本の英語教育に飽き足りなかった学生も，レベルの高い講義を聞き，英語の討論に参加することの中から，自分の現在の英語力を粉飾なしに，直に知ることができ，今後の英語学習への強い動機付けを得ると同時に，普段の真摯な学習の大切さを思い知る機会となる。

6．国際遠隔授業を通じて，国際的な場面で日本人に求められる英語力のレベルの高さを知った学生たちが，大学を卒業し，小・中・高の英語教育に携わっていくことで，日本の英語教育水準が確実に上がるものと予想される。

昨年の10月から今年の３月にかけて実施されたすべての授業に逐一立ち会った経験から，今回の15コマの連続講義の特色を以上にまとめてみたのだが，実は私は，2004年から2006年にかけて，毎年２～３コマの英語の授業を，それも今回と同じく，ソニア・ミツアック博士の講義を，私が当時岐阜大学で担当していた『異文化コミュニケーション論』という既存の授業の中に，補完授業として取り込んだ経験も持っている。

しかし，今回のものは15回の連続授業であるところに大きな特徴があり，学生に与える語学教育的なインパクトは比較にならないほど大きかったといえる。また，内容的に，例えばオーストラリアの移民の歴史を扱った部分でも，ダイジェスト版とは比較にならないほど豊富な資料を駆使しつつ，詳しく解説された。また，その際，アボリジニの人たちに対する入植当時のイギリス人の態度の説明にしても，その方面での最近の専門書が参照されたことが講義資料の中にきちんと断ってあり，英文のハンドアウト資料も毎回のように豊富に用意されていた。

今回の授業の特筆すべきもう一つのポイントは，一定の学力を持った受講生であることが初めから予想されていたことを踏まえて，終わりに近い何回かの授業は，講義形式を離れて，意図的にインタラクティヴな形式を採用し，ごく自然に討論が出来るように環境が整えられたことである。例えば，戦後，極めて良好に推移してきた日豪の貿易，軍事，文化交流に関する授業では，唯一日豪の間に意見の食い違いの見られる日本の調査捕鯨活動に関するメディアの反応について紹介があったあと，各自自分の意見を英語で述べる事が求められた。日本人として日本の立場をきちんと英語で述べることは，まさに国際的な場で日本人の態度を明確にし，国際的な理解を求めると言う行為を地でいくような緊迫した場面であった。日本人の何人かの学生や市民は，きちんと自分の意見を英語で表明していた。英語の巧拙はさて措いても，それが相手にきちんと伝わることが大事である。この点で，受講生の大部分はほぼ及第であった。

また，今回極めて目新しかったのは，初めてパワーポイントが使われたことである。パワーポイントを有効に使用することで，難しい議論も極めて明快に論点が絞られ，併せて豊富な映像資料が学生の理解を助けた。なお，パワーポイントの文字の種類，大きさ，配置，配色などに関しては，シドニー大学の遠隔教育の技術サポーターの持つ知見がある程度参照された模様である。ただし，今回は，C

D販売も可能な，精緻に作り込まれた録画授業のレベルにまでは達していない。それには予算が足らなかったからである。したがって，ライブの国際遠隔授業としては，今回のもので十分であった。

今回の企画がこのように無事に，しかも成功裏に実施された事実は，岐阜大学とシドニー大学との間で培われてきた国際遠隔教育の歴史を飾る成果として長く記憶され，今後に向けての大きな里程標となったことは間違いないが，その真の意味が強いインパクトとなって，岐阜大学やシドニー大学はもちろん，この企画を注意深く見守ってこられたいくつかの日本の大学関係者たちに，しっかりと伝わることが大切である。私たちとしては，本報告書をしっかりと読んでいただき，その意味の大きさに改めて思いを馳せていただきたい。

5．今後の展望

私たちは，今回の企画の成功によって新たな展望が開けたと感じている。それはどういうことかといえば，15コマの，百パーセント英語による授業が，交際遠隔授業という方式で現実に，日本の大学の正規の授業の中でおこなわれたということは，ごく普通の意味での授業交換がいまや可能になったと言うことである。もはや，従来のモジュールとしての数コマの授業の交換ではなく，コースとしての特定の授業を丸ごと交換することが，非常に現実味を帯びてきたと言うことである。

つまりこれからは，要請さえあれば，日本の大学から海外の大学へ，同様の手法で，フルコースの授業が配信できる，ということも意味しているのである。そして今後は，そのようなニーズの発掘と授業開発の時代に入る，ということである。相手は必ずしもシドニー大学でなくとも良い。また，送る授業の種類についても，必ずしも日本の文化や日本語関係の授業に限る必要もない。相手に払っていただくコストも，これと言って決まった額が存在するわけではない。最初は手探りで，あるいは話し合いで決めればよい。後で調整しあっても良い。それよりも，このような授業の交換が原理的に可能であることが証明された，ということが大きな意味を持つのである。

無論，コストや手法や手間隙の総量についていろいろ質問も受けることになるであろう。しかし，本報告書を読んでいただければ，およそのことは見当が付くはずである。ひょっとしたら，それは極めてスムーズに実現したように見えるかもしれない。けれども，実際には，これまで無数の問題を一つ一つ解決しながら，一歩一歩進められてきたのである。原理的にはたしかに可能であっても，すべての大学がすぐに応用できるほど生易しくはないかもしれない。

私たちとしては，呼ばれれば出かけて行って気軽にお話をさせていただいても良いと考えている。ひょっとして，報告書には載らない，いろいろな失敗例や苦労話がお役に立つ場面もあるかもしれないと考えるからである。

参考文献

1. 国際遠隔教育研究プロジェクト（代表江馬諭）(2004),「ストリーミング配信技術を用いた遠隔授業に関する研究」『産官学連携共同研究成果報告書（最終報告）』，岐阜大学教育学部
2. 山田敏弘，他 9 名，(2005)「テレビ会議システムを用いたシドニー大学向け日本語授業の実践報告」,『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）』，7, 19-41,
3. 石川英志，他10名，(2005)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の取り組み」,『日本教育工学会誌』，29(1), 59-67,
4. 西澤康夫，他 9 名，(2005)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の評価　—2005年シドニー大学から岐阜大学へ配信された遠隔授業について—」,『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』，54(1), 55-65,
5. 青柳孝洋，他10名，(2006)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の評価　—2005岐阜大学からシドニー大学へ配信された授業「江戸囃子」について—」,『岐阜大学教育学部研究報告（実践研究）』，8，101-117,
6. 青柳孝洋，他 9 名，(2006)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の取り組み」,『メディア教育研究』，3

(1), 1-10,
7. 山田敏弘，他９名，(2007)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の評価」,『教育システム情報学会誌』, 24(1), 35-44,
8. 西澤康夫，他10名，(2007)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の評価と理解度　―2006年シドニー大学から岐阜大学へ配信された授業「オーストラリアの他文化主義」について―」,『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』, 56(1), 79-89,
9. 橘　良治，他10名，(2007)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の理解度――2006年度岐阜大学からシドニー大学へ配信された授業「キレる児童の心理」について――」『岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)』56-1，91-103,
10. Mycak, Sonia，他9名，(2008)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の理解度?2007年度岐阜大学からシドニー大学へ配信された授業について――」『岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)』57-1，71-78,
11. 青柳孝洋，他8名，(2008)「モジュール交換方式を用いた国際遠隔授業の評価に関する一考察」『岐阜大学教育学部研究報告(実践研究)』10，51-59,
12. 上田康信，他３名，(2010)「新しい語学教育の試み－国際遠隔授業と地域連携によるサテライト教室（１）」,『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）』, 12,241-249,